

歌曲の祭典



演奏 洗足学園音楽大学 声楽コース 歌曲研究履修生

2022年1月8日(土) 13:00開演 (12:40開場)

洗足学園 シルバーマウンテン 1F

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催 洗足学園音楽大学・大学院

W.A.モーツァルト すみれ Das Veilchen(Goethe)

石井 杏実(3年)

1785年作曲。詩はW.v.ゲーテによるジングシュピール『エルヴィレとエルミーレ』から採られており、すみれと羊飼いの娘の様子が、語り手によって劇的に描かれている。モーツァルトは詩節の現実性に音楽を対応させた通作歌曲形式で作曲。ピアノ部分では羊飼いの娘の軽い足取りや歌声が表現されるなど、随所に物語の進行を予感させる音が配されている。最後の5小節で歌われる言葉は、モーツァルトによる挿入であり、自分の命を失ってまでも娘への恋心を持ち続ける健気なすみれに、語り手がまるで溜め息をしているかのように表現されている。

W.A.モーツァルト ルイーゼが不実な恋人の手紙を焼いたとき

Als Luise die Briefe ihres ungetreuen Liebhabers verbrannte(Baumberg)

荒 理緒奈(3年)

1787年作曲。詩はオーストリアの女性作家、詩人であるG.バウムベルクによる。ルイーゼが嫉妬の炎を燃やし、裏切った恋人からの手紙を焼く女性の内面劇を描いており、詩人の実体験を元に書かれたとも言われている。印象的な前奏から始まり、ピアノ部分では、32分音符の細かい音形が奏され、情熱的に彼女の心の動きを表現し、彼に対する想いが断ち切れず、未練が残っていることが暗示されているかのような後奏で締めくくられる。

W.A.モーツァルト クローエへ An Chloe(Jacobi)

佐々木 遥(3年)

1787年作曲。G.ヤコービによる原詩は13節で書かれているが、モーツァルトは冒頭の4節を引用。田園詩風な爽やかな情趣が貫かれた中、クローエに対する激しい恋情を歌っている。2拍子の前向きな拍感、途切れるように語る休符からクローエへの熱い想いが表現されている。また曲中後半に度々語られる“ermattet(疲れる)”には、浮遊している様な夢見心地な音形が声部・ピアノ部分に与えられており、疲労ではなく、幸福感に浸っている様が表現されたい。

F.シューベルト ミニヨンの歌 Lied der Mignon(Goethe)

福田 真桜(3年)

1826年作曲。詩はW.v.ゲーテによる『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』から採られている。自分の生い立ちを知らない少女ミニヨンの姿が描かれており、憧れと悲しみが交差する儂い愛の歌である。心に秘めたように静かにヴィルヘルムへの愛が歌われ、16分音符の激しい音形やテンポから、ミニヨンの悲痛な心情が吐露されている。再び曲の前半部分を反復することにより、ミニヨンの心の衰弱が一層強く描かれており、情景の変化と共に移りゆく音楽にも着目されたい曲である。

F.シューベルト 糸紡ぎのグレートヒェン Gretchen am Spinnrade(Goethe)

陳 綺銘(2年)

1814年作曲。詩はW.v.ゲーテの『ファウスト』第一部から採られており、グレートヒェンが糸車を回しながら恋人ファウストを慕って口ずさむ歌である。伴奏の反復する音型は糸車の回転を表し、その回転はグレートヒェンの気持ちの動揺に応じてテンポを速めていく。恋する乙女の苦しみ、絶望感が如実に表現されており、

興奮のあまり糸車の動きが止まり、そして再びためらうように動きだすなど、歌詞に即した伴奏も特徴的である。曲の表情を息づかいにより表現したい一曲である。

J.ブラームス 日曜日 Sonntag(Uhland) 松本 一恵(2年)

1860年作曲。詩はL.ウーラント編纂による『高ドイツと低ドイツの古い民謡』から採られており、日曜日に教会を訪れる娘に恋心を抱く男性の心情を歌っている。2回繰り返される“Wollte Gott”から“神様どうぞあの娘のそばにいらして下さい”と切に願う男性の想いが感じられ、また、ピアノ部分の途切れることなく流れるように奏される音形から、奇をてらわない素朴さが連想される。民謡風な親しみやすさのある曲である。

R.シューマン 「ミルテの花」より 献呈 Widmung(Rückert) 宮根 千翔(3年)

1840年作曲。『ミルテの花』はロベルトが花嫁となるクララに捧げた愛の歌曲集。その中の1曲目となる「Widmung」は、F.リュッケルトの詩による愛する人への想いが描かれた歌である。声部では溢れんばかりの愛を語り、ピアノ部分はその愛を語る心の内が弾むようなリズムや軽やかさで表現されている。また、調性が変化した部分の詩や和音には、安らぎや祈るような想いが込められており、情熱的な愛だけでなく、心から愛情のこもった表現が伺える。

R.シューマン 「ミルテの花」より はすの花 Die Lotosblume(Heine) 高岡 未侑(3年)

1840年作曲。ロベルトが結婚式前日に花嫁であるクララに贈った歌曲集『ミルテの花』の7曲目。詩はH.ハイネによる。太陽の光を恐れている“はすの花”が、暗い夜になると恋焦がれる月の光に照らされて花開いていく様子が神秘的に歌われている。ピアノ部分でも月の登場や花開く様子が、ピアノの上行音形や深い色合いを帯びた和音、調性の変化などで表現されている。月に対する叶わぬ恋の切なさ、愛ゆえの痛みを物語っており、クララへのシューマンの想いとも重なる一曲である。

R.シューマン 「ミルテの花」より 君は花のように Du bist wie eine Blume(Heine) 岸 佳那子(3年)

1840年作曲。ロベルトが妻のクララに捧げた歌曲集『ミルテの花』全26曲の第24曲にあたる。詩はH.ハイネによるもので、ハイネの詩集『歌の本 第3部 帰郷』から採られている。この詩が語る優しさや深い愛情が、2拍子のゆったりとしたテンポで表現されている。ピアノは穏やかに3和音の連打を奏するが、曲の後半で16分音符から4分音符へと変化し、クレッシェンドと共にこの曲の最高音へと導かれる。“彼女をお護りください”と神への祈りが込められた抒情的で優和に満ちた印象的な部分である。

R.シューマン 「子供のための歌のアルバム」より 時は春 Er ist's(Mörike) 石塚 紫音莉(3年)

1849年作曲。デュッセルドルフ時代のシューマンが子供の教育を目的とした一連の作品に着手し誕生した『子供のためのアルバム』op.79に収められている。全28曲中の23曲目にあたる「Er ist's」はE.モーリケの詩による。前奏から春が来た喜びに溢れ、まるで子供の無邪気かつ純粋な気持ちが、風の様になびき、踊っているかのように感じられる。この曲は“時は春”とも訳せるが、“彼だ”と訳すこともできる。“彼”とは“春”のことであり、春が来た喜びを囁みしめている様が高音や強弱、リズムに表れている。

R.シューマン 2人の擲弾兵 Die beiden Grenadiere(Heine)

鈴木 諒汰(2年)

1840年作曲。『ロマンスとバラード第2集』op.49 全3曲中の1曲目にあたる。詩はH.ハイネ『歌の本 第1部 若き悩み』から採られており、ナポレオンのロシア遠征(1812年~1814年)で捕虜となり、ドイツを経由し母国のフランスに帰国する2人の擲弾兵の会話が描かれている。当時の擲弾は重く、取り扱いにも危険が伴うため、曲のタイトルでもある擲弾兵とは勇敢な兵であり、且つ精鋭部隊とみなされていた。君主ナポレオンに対する忠誠心が語られ、終結部では、フランス革命時の賛歌であった「ラ・マルセイエーズ」が高らかに響く。

ドイツ歌曲研究2

指導教員 馬場 由香 / ピアノ 西川 麻里子

R.シューマン くるみの木 Der Nussbaum(Mosen)

稲葉 みのり(4年)

「くるみの木」はR・シューマンによって“歌曲の年”と呼ばれる1840年に作曲された。この曲は『ミルテの花』という歌曲集の中の第3曲目にあたる曲である。『ミルテの花』はシューマンが妻のクララと結婚式を挙げる前日に彼女に捧げた歌曲集である。モーゼンによって書かれた詩の中には対句が作られており、曲の持つ可愛らしい雰囲気を引き立たせている。「くるみの木」は勿論、この歌曲集にはクララへの愛が沢山込められている。

R.シュトラウス 万霊節 Allerseelen(Gilm)

奥山 雅子(3年)

この曲は1885年に作曲された歌曲集『最後の木の葉による8つの歌曲』の第8曲目です。曲のタイトルである「万霊節」は毎年11月、カトリックですべての逝去した信者の霊を祭る記念日の事を指しています。その万霊節の日に先に亡くしてしまった恋人への想い、そして恋人のお墓参りに来て過去の思い出を振り返り、もう一度貴方に会いたい、また貴方と一緒に過ごしたい。という少し切なくも儂い愛の曲となっています。

R.シュトラウス 君はぼくの心の冠 Du meines Herzens Krönelein(Dahn)

齋藤 遥歩(3年)

1887年から1888年にかけて作曲された『5つの歌曲』Op.21の2曲目。シュトラウスの歌曲の中でも人気の高い曲です。特にこの5曲の中では演奏される頻度が最も高く、簡潔で古典的なスタイルによっています。流麗な恋人を讃えるメロディと微妙な転調をして、恋人以外の人々の下品さをほのめかしているかのような中間部との対比が良い響きをもたらします。

R.シュトラウス 星 Der Stern (Arnim)

上本 杏子(3年)

この歌曲はアヒム・フォン・アルニムの詩3篇と、ハイネの詩2篇で構成された5つの小さな歌曲の1曲です。題名の通り、星(彗星)について歌っています。昔から星は「将来を予言する」特に「悪い兆しを予言する」と言われ、占いなどにも使用されてきました。そのため人々からはあまり好ましく思われていませんでしたが、「私」にとっては心の安らぎを感じさせてくれると歌っています。

R.シュトラウス 献呈 Zueignung (Gilm)

河村 未奈(3年)

シュトラウスが初めて出版した歌曲集は、ギルムの詩集、『最後の葉』から選ばれた8つの詩によるものである。その歌曲集の冒頭1曲目に置かれているこの曲は、冒頭から旋律が波打ち、自堕落な自分を立ち直らせてくれた恋人への素直な感謝と愛の気持ちが表現されている。通作歌曲であるこの曲の第3部は、一気に高揚した旋律になり、この曲の一番の盛り上がりの中幕を閉じる。短いながらも素直で伝わりやすい旋律と歌詞が、この曲の魅力である。

R.シュトラウス ああ恋人よ、僕は今お別れをしなければならない

Ach Lieb, ich muss nun scheiden(Dahn)

山内 雅貴(4年)

この曲は、シュトラウスによって作曲されたOp.21の3曲目。“Ach”と感嘆詩で始まるこの題名から想像ができる通り、恋人に別れを告げなければならない悲壮感を歌った曲である。

”木や柳も泣いている”と擬人法を使い、自然までもが自分たちの別れを嘆いているという表現が特徴的である。後半の7度の下降など感情の動きが随所に表れている。

R.シュトラウス 愛を抱いて Ich trage meine Minne(Henckell)

作間 優奈(4年)

Ich trage meine Minne は作品32『5つの歌』の第1曲である。1896年の作品で、妻パウリーネに献呈されている。甘美な曲調によってよく知られる3部形式の曲であり、中間部にも前部の音楽的素材をふんだんに使った一種の変奏である。親しみやすいメロディーとストレートに愛を伝える詩はシュトラウスの代表曲とも言われている。

E.W.コルンゴルト 幸せの願い Glückwunsch (Dehmel)

上原 愛美(4年)

E.W.コルンゴルトはオーストリア出身で、アメリカなどで活躍した作曲家である。映画音楽で有名であるが、オペラ《死の都》を初めとしたクラシック曲も多く書き残している。彼の歌曲集『5つの歌曲』は、1948年に作曲された。戦時中、純粋な音楽作品の創作を封印していたが、純音楽作曲家に戻るべく戦後ウィーンを訪れた。しかし、「映画音楽に魂を売った作曲家」として受け入れられず、泣く泣くアメリカに亡命することになる。そんな失意の中作曲されたこの歌曲集には、イデオマティックさ、そして、どこか物悲しい寛大さが現れている。

～ 休憩 ～

G. ロッシーニ 約束 La promessa (Metastasio) 北野 海晴 (2年)

ロッシーニは1830年から1835年の間に全12曲からなる歌曲集『音楽の夜会』を作曲した。「La promessa」はその中の第1曲目のカンツォネッタで、愛する人に対して変わらぬ愛を約束する明るい曲調の作品である。アッチャッカトゥーラと呼ばれる装飾音を多く用いて軽快さを出しつつも、愛する人に言い聞かせるように音を紡いでいる。中間部分には自分の中で噛みしめるように情熱的に、たった一人を一生愛し続ける強い意志が表現されている。

G. ロッシーニ 非難 Il rimprovero (Metastasio) 小林 瑠菜 (2年)

『音楽の夜会』という歌曲集の第2曲目にあたります。主人公である「私」が、愛しい人への想いを綴った歌です。しかし愛しい人は「私」に愛されることを望んではいません。それでも、愛さずにはいられない程愛し、苦しんでいるつらい想いを歌った歌です。この曲は悲しくも優しい主部と、苦しさを感ずる力強い中間部との対照が魅力的です。この歌詞にロッシーニはいくつもの曲をつけていますが、その中でも一番有名なのがこの曲です。

G. ドニゼッティ 永遠の愛と誠 Eterno amore e fè (作詞者不明) 中森 優衣 (2年)

歌曲集『カンツォネッタ集』の第1曲目に収められており、愛する人に対して神の御前で永遠の愛を誓う切実な想いが表現されています。彼女に寄り添うような優しい前奏から始まり、穏やかな旋律の中でもアクセントを伴って情熱的に歌われます。その後、何度か転調を繰り返す中で、生きるのも死ぬのも彼女のためであるという決意が付点のリズムや強弱記号などで訴えかけるように紡がれます。一曲を通して愛する人への想いが溢れるような曲調となっています。

G. ドニゼッティ 舟人 Il barcaiolo (Tarantini) 高村 美友 (2年)

歌曲集『ボジリッポの夏の夜』の第1曲目に収められている。8分の6拍子のゆったりとした曲調の中で、ゴンドラがゆっくりと進んでいく様子を人生の流れとして表現している。愛している女性との今ある幸せに浸るような明るい曲調の後、嵐が訪れたような曲調へと変わる。この力強い音楽には、この先どんな困難が待ち受けようとも彼女を愛し続けていくという覚悟が表現されている。曲調が何度も変化していく様が魅力的な作品である。

G. ドニゼッティ 糸巻き La conocchia (Pidera) 中西 美友 (2年)

歌曲集『ボジリッポの夏の夜』の第5曲目に収められていて、カンツォーネ・ナポレターナ（歌詞にナポリ方言が用いられた歌曲）にあたります。愛する人のことを考えて胸が高鳴る想いが、8分の6拍子の伴奏にあわせて朗々と歌われる曲です。恋焦がれて心が躍る気持ち、胸が締め付けられるような切ない気持ちが表現されています。愛する人を想うことで感情が浮き沈みする様子が旋律に表れており、最後は「ああ！」とため息で終わるのが特徴的な楽しい曲です。

G.ドニゼッティ 愛と死 Amore e morte(Redaelli)

菊地 健太(2年)

歌曲集『インフラスカータの秋の夕べ』の第3曲目に収められている。男が死に際に愛していた女性を想い、もう振り向いてくれない悲しみと真実の愛を女性に捧げる曲。一曲を通して紡がれる分散和音の穏やかな伴奏の音形の上で、彼女に愛されなくなった無念や悲しさが切々と歌われる。曲の後半部分では長調に転調する部分もあり、自分が死ぬことによって彼女が私の大切さに気づくであろうという微かな希望などの感情が細かく表現されている。

G.ドニゼッティ ジプシーの女 La zingara(Guaita)

矢嶋 愛実(2年)

歌曲集『ウィーンの印象』の第1曲目に収められている。現在では差別的なニュアンスがあるために使われなくなった「ジプシー」という言葉が題名として付けられているが、踊りや歌が得意で、陽気な一面を持っている。細かく転がるパッセージや軽快なリズムにその自由な様子が表れている。曲の後半には雰囲気が一変し、一人の青年に出会った幸せな思い出と、今でも彼を想い続けている恋心を優雅なメロディーの中で歌っている。

G.ドニゼッティ 溜め息 Il sospiro(Guaita)

石津 秀悟(2年)

歌曲集『ウィーンの印象』の第4曲目に収められている。愛する人の亡骸を胸に抱きながら、自分も死を願い、微笑みながら天国へと昇ることを願っている。想いがより強くなる中で、短調から長調に変わり、テンポの変化に伴って音楽が盛り上がっていく。そして、自分が死ぬことを望まないであろう彼女に対して、せめて胸の中に留まるように懇願する。重く沈んだ表情が一変し、熱い想いが激昂するこの曲には、愛する人を失う悲しみが顕著に表現されている。

G.ドニゼッティ 一滴の涙 Una lacrima(作詞者不明)

雨森 あかね(2年)

歌曲集『音楽のマチネ』の第3曲目に収められています。歌唱冒頭に「Dio! 神様!」とフォルテの指定の中で神に問いかけた後、すぐにピアニッシモで「苦しみから救い出してほしい」と切々と語りだします。内から滲み出すような祈りが感じられる曲となっており、緩やかなテンポから次第に様々なリズムを使って盛り上がりを見せます。最後には非和声音から始まる下行形の進行で、何度も苦しみから救い出してほしいと神に懇願します。

イタリア歌曲研究2

指導教員：高田 正人 / ピアノ：谷川 明

F.トスティ 薔薇 Rosa(Pagliara)

西 美穂(4年)

Rosaは1885年にトスティによって作曲され、詩はパツリアーラによるものです。

トスティはイタリアの作曲家で、主に歌曲を多く作曲しました。トスティの歌曲は、美しい旋律と繊細な和音でたくさんの人に愛されています。この曲も典雅でロマンティックな曲で、本の葉にはさまれた薔薇を通して、片想いの切なく甘い感情を歌っています。

中田 喜直／三好 達治・詩　　すずしきうなじ　　中村 美涼(3年)

雪の中でもひっそりと咲く水仙花の凜として気高い姿と、俗世間から離れて自分が決めた事を静かに守りつつ、しかし俗世を避けることなく生きる女性の姿とを重ね合わせて歌う。フォーレやドビュッシーの歌曲に感銘を受けた中田喜直が意図的にフォーレの手法を取り入れ、やわらかく滑らかな音楽になっている。フランス風の音楽でハープのようになっている伴奏が、水仙花の甘い良い香りと春の訪れを告げるように感じられる。

湯山 昭／中山 知子・詩　　夜想曲　　小林 礼乃(3年)

作曲家、湯山昭は管弦楽曲や室内音楽、ピアノ曲や合唱曲、歌曲、童謡のほかにも校歌など幅広い分野を手がけている。この曲の前半は八分の九拍子に乗せた爽やかな楽曲になっており、中間部は悲しみや苦しみといったものを表現し、後半では再び冒頭の爽やかなテーマに戻る。最後は半音ずつ高音に上がり雄大さを表している。

三善 晃／高田 敏子・詩　　「四つの秋の歌」より 駅　　土川 由莉子(3年)

「四つの秋の歌」第1曲。この曲には、夏が過ぎ去ってしまった寂しい気持ちと、秋という新しい季節に期待する様子が伺える。詩の中の少女がずっと待ち続けているものとは何であるか、を演奏者にとっても考えさせる。繰り返される転調から、巡りゆく季節に対しての思いが込み上げてくる。秋という季節感の色濃い作品であり、三善晃の描く世界観を感じながら、少女が秘めた思いと共に歌いたい。

團 伊玖磨／北原 白秋・詩　　「五つの断章」より 舟歌-片戀-　　佐久間 涼平(3年)

この曲は、アカシヤの花が散り始め少し肌寒くなり始めた秋の夕暮れ時に、曳舟が遡るゆるやかな川沿いを、抱いた片恋がうまくゆかずに悩み歩いているという詩である。北原白秋が作り出す美しい日本語を、ゆるやかな川の流れの上を進む舟を想起させる伴奏と、片恋の憂いを感じさせる哀愁のあるメロディーが、さらにそれを引き立たせる美しい曲となっている。

中田 喜直／寺山 修司・詩　　「木の匙」より 悲しくなったときは　　菅原 実華子(3年)

「木の匙」は男女二人の歌い手のための歌曲集。その10曲目にあたるこの曲は女性目線の内容となっている。“悲しくなった時は海を見に行く”彼女は何度も海を訪れ激しくも穏やかなる海に、自分の小ささや、人間にいつかやってくる終わりが「海」にはないことに気づく。どんなに辛く厳しい毎日でも海だけは変わらずにそこにある。“海だけは終わらないのだ”というフレーズには、普遍的で雄大な海があなたの眼前に広がるのが見えるだろう。

中田 喜直／江間 章子・詩 夏の思い出

安井 円香(4年)

「夏の思い出」は、江間章子作詞、中田喜直作曲の歌曲。NHK からの依頼で作った曲である。1949 年発表の日本の歌曲。中学校の音楽教科書にもよく掲載され、女声合唱や混声合唱などの合唱曲としても編曲されている。「夏の思い出」の歌詞では、花の名前としてミズバショウの他にも、「シャクナゲ」が登場する。シャクナゲ(石楠花)は、ツツジ科ツツジ属の低木で、花の色は白や赤が多く、黄色なども見られる。

中田 喜直／小野 芳照・詩 ゆく春

櫻井 千春(4年)

曲名の通り、過ぎ去ってしまう春への名残惜しさを、日本の情緒たっぷりに表現されているとともに、曲の終わりにはどこか、次にくる夏への希望も感じられる。目まぐるしく変わる曲調は、風に揺れる糸柳、夕方に鳴る鐘の音など情景が見事に表現されている。また、聞き馴染みのある童謡や、日本調にこぶしをいれたように歌う技法が含まれており、最後まで楽しんで聞いていただける一曲。

小林 秀雄／藤田 圭雄・詩 日記帳

二瓶 みづき(4年)

若い男性の淡い恋心がワルツ調の伴奏に乗って語られます。

貴女の名前が沢山書かれた日記帳を彼はブーゲンビリヤの茂みの中に隠します。

朝の風が吹き、花が揺れた時、夜に星が輝く時、彼はその茂みの方を見つめ、高鳴る恋心に息を詰まらせるのです。

ブーゲンビリヤは南国に咲く、鮮やかな花。花言葉は「あなたしか見えない」です。

小林 秀雄／峯 陽・詩 すてきな春に

國武 睦子(4年)

「演奏会用アリア」として作られ、劇的で華々しいメロディーが特徴的であり、伴奏もオーケストラのようなスケートの大きさを感じさせる。レチタティーヴォでは、ピアノとの掛け合いで恋に出会った時のうろたえや目覚め、アリアでは三拍子の軽やかなメロディーで春の描写とともに愛することの喜びを高らかに歌い上げている。テンポの揺れが多く、心が激しく動く様を自由に表現できる曲である。

小林 秀雄／中村 千栄子・詩 夏の日のレクイエム

川崎 宇鷹(4年)

小林は当時、NHK との深い関わりがあり、NHK 委嘱のラジオ音楽劇 2 作が芸術最奨励賞を受賞したり、同局番組の「みんなのうた」では、様々な楽曲を作曲・編曲したりしていた。そのため一般的な認知度は比較的高く、「落葉松」や「日記帳」などの名曲も数おおく作曲している。〈夏の日のレクイエム〉は、テノールとハイ・バリトンにむけたイタリア風カンツォーネとして作曲された。どことなく切ない歌詞でありながら、力強い印象の音楽となっている。

L. ドリーブ カディスの娘たち Les filles de Cadix (Musset) 行場 結佳(3年)

ドリーブが作曲した唯一の歌曲で、オーケストラ伴奏で書かれた。曲名にあるカディスはスペインのアンダルシア地方にある街。ボレロのリズムに合わせた伴奏とエキゾチックなメロディーが印象的な曲である。カディスの娘が仲間と一緒にボレロを踊り、お互いに美しさを自慢しあって楽しんでいる。そこへ貴族が金貨を片手に口説きにやってくるが、娘たちは聞く耳を持たない。歌のヴォカリーズが、陽気で魅惑的なカディスの娘たちを表現している。

E. シャブリエ 幸福の島 L'île heureuse(Mikhaël) 菅原 智里(3年)

シャブリエは公務員生活を送る傍ら、独学で作曲の勉強を続けた。そのため独特なリズムと自由さ、ユーモアさがあり、使われる和音は大胆である。この曲では伴奏形が主に三連符になっており、テンポが揺れるところが特徴的で、波を打つ様子を表している。大きな船に乗り、澄み切った波の上で夢と希望を語り、幸福の島を目指す。心ゆくまで愛し合おうと恋人へ愛を朗々と歌っている幸せ溢れる曲である。

G. フォーレ 夢のあとに Après un rêve(Bussine) 立田 紗音理(3年)

詩は、夢で出会った美しい女性と甘美な時間を過ごす男が、やがて夢から覚め「あの美しい幻を返してくれ」と嘆く姿を描く。フォーレは作曲の前年、婚約を破棄されたため、詩が彼の悲痛な心情を表しているようにも感じる。伴奏の和音は、終始同じテンポを保ったまま八分音符で美しく移り変わっていき、甘美で幻想的な旋律が表す、夢から醒めたくないという思いに反して、無常に過ぎる去る時間を表している。心に静かに響く作品である。

E. ショーソン 蝶々 Les papillons(Gautier) 鈴木 彩乃(3年)

初めて聴いた時から耳に残る、軽やかでふと目を逸らした隙にどこかへ行ってしまいそうなピアノパートは、この曲の題名でもある蝶々たちが群れをなして飛んでいる様子を描写している。主人公の心の内に秘めた情熱的な恋心を、対照的な軽やかに飛んで行く蝶々に乗せて歌う。恋心によく似た絶妙なミスマッチ感が魅力的な曲。

E. ショーソン 蜂雀 Le colibri (Leconte de Lisle) 井上 ころろ(3年)

竹のざわめきやハイビスカスの香りといった、南国の情景を表現する歌とピアノとの三連符の掛け合いの響きが印象的。小さな鳥ハチドリが吸う花の蜜を愛、蜜を吸う姿を口づけに例え、味わいすぎて死んでしまう様に愛する人の口づけで満たされて死にたいと願う。抑えながらも溢れそうな感情を表す独特な五拍子の中で、深く重いように感じる歌詞に対してショーソンのつけた明るく凛とした曲との対比がより一層描かれる情景を広げていく。

H. デュパルク 悲しき歌 Chanson triste(Lahor) 前川 乃慧(4年)

85歳という大往生であったにも関わらず37歳で神経衰弱を患い、作曲家としての人生が短命であったデュ

パルク。また完璧主義者であったこともあり、現存する作品はごくわずかである。「悲しき歌」はその数少ない歌曲の中の一曲で、20歳に作曲された曲ながらも繊細で劇的な叙情表現が感じられる。この曲のラオールの詩から読み取れる、恋人と共有する切なくも穏やかな空気感が、終始流れ続けるピアノのアルペジオから捉えることができる。

フランス歌曲研究2

指導教員 神谷 明美 / ピアノ 林 順子

C.ドビュッシー 星の夜 *Nuit d'étoiles*(Banville) 畠井 美緒(4年)

この曲は、テオドール・ド・バンヴィルの詩集『*Les Stalactites*』(鍾乳石)の「*La dernière Pensée de Weber*」(ウェーバーの最後の思い)の詩に、ドビュッシーが初めて書いたと言われている歌曲である。内容は輝く星空の下で過ぎ去った日の恋を夢見ながら恋人のことを思い出している、という曲である。ドビュッシーは作曲にあたり詩の一部分を削除していて、その部分には死者への愛を暗示する内容が書かれている。星が輝いているかのような美しい伴奏とロマンティックなメロディーが特徴的である。

C.ドビュッシー ロマンズ *Romance*(Bourget) 高津 琴音(4年)

ブルジェの詩による「ロマンズ」は、『二つのロマンズ』と題して1891年に作曲された1曲である。

曲は、流麗な旋律にしっとり落ち着いた雰囲気をもつ。

前半は、己の恋心の清らかさ、美しさを尊び、後半はそのときめきが霞がかり冷めていく様子をどこか諦観した気持ちで語っているのである。

A.ルーセル 若き貴人に *À un jeune gentilhomme*(*Ode chinoise*/Roché 訳) 松添 あおい(4年)

中国の古い頌歌が英訳され、さらにロシェが仏訳した詩に、ルーセルによって曲が付けられた。

恋人が彼女の家に入ってこようとしている。入らないで！芝生に踏み込まないで！両親がなんと言うでしょう！部屋の外にいて！サクラソウを駄目にしないで！世間の皆さんがなんと言うでしょう！と彼女が止めているが彼はどんどん近づいてくる。彼女は彼を愛しているが、それで何が起こるのかを考えたくないのだ。

F.プーランク 愛の小径 *Les chemins de l'amour*(Anouilh) 松本 明音(4年)

「愛の小径」はプーランクの数多い歌曲の1つで、ジャン・アヌイの芝居《レオカディア》の付随音楽として作曲された。曲では恋人との思い出を大切に振り返っている場面が描かれている。美しく甘美な歌の旋律と繊細で上品なピアノの旋律が絡み合う魅惑的な曲である。

F.デーレ 白いリラが咲く頃
Quand refleuriront les lilas blancs(Lelièvre, Vanra, Rouvray) 三澤 悠華(4年)

日本では宝塚歌劇団で「すみれの花咲く頃」として多くの人々に親しまれている。この曲は、フランスではシャンソンとして愛唱されている。元のフランス語の歌詞では「すみれ」の部分が「白いリラ」に代わり、曲中では白いリラが咲く季節を、愛する人と待ち焦がれている乙女を描いている。春風を感じさせる伴奏に可愛らしいメロディーを乗せて奏でる愛らしい曲である。